慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自我の深淵と狂気 : 『レンツ』における人間存在の基本原理
Sub Title	The insanity and abyss of the self : The fundamental problems of the human being in Lenz
Author	岩下, 真好(Iwashita, Masayoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1978
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.37, (1978. 2) ,p.25- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00370001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自我の深淵と狂気

――『レンツ』における人間存在の基本原理――

岩下真好

(1)

グッコーにあてて社会の変革について述べた書簡のなかで、ビューヒナーは次のように語っている。

「社会を理念によって、知識階級によって変革するとおっしゃるのですか。それは不可能なことです。私たちの時代はまったく物質的なのです。(……) 現代社会の全生活は、ただ、どうすることもできない退屈を追い払う試みの数々にほかなりません。この社会が死に絶えること、これこそ社会がなんとか体験できるただひとつの新しいことなのです。」(傍点は原典においてイタリック体で強調されている部分)[1]

この書簡が書かれた一八三六年といえば、小説『レンツ』(一八三五年十月以降) 及び戯曲『レオンスとレーナ』(一八三六年初夏)『ヴォイツェック』(同年冬) の創作、それに自然科学研究など、短いビューヒナーの生涯のうちでもっとも創造的な時期にあたっている。ビューヒナーはここで、社会のなかで、何らの積極的な行為もなしえず、ただ退屈を追い払うことしかもとめえない人間のさまに触れて、人間は外部の物質的力によって規定され支配されているのであって、「理念」や「知識」に基づく行為などといってもそれは幻想にすぎないと考え、人間の理性と意志の力と、それに則った行為の主体性とについて悲観的な立場をあきらかにしている。

これと同様な考えかたを、この書簡の約二年前に書かれた婚約者あての書簡（一八三四年三月）にもみることができる。それはビューヒナーの世界観・歴史観を示したものとしてビューヒナー論にしばしば引用される有名な書簡であるが、そこで彼は、人間は本質において均質であり、また、例外なく外部の力に規定されている、それゆえ個人や個人の行為などというものはさしたる意味がないと述べている。「ぼくは革命の歴史を研究した。歴史の恐しい宿命に打ち砕かれる思いがした。ぼくにわかったのは、人間の本性のうちにはぞっとするような均一性が、人間の境遇には避けることのできない力が、だれかれというのではなく全体に付与されているということだ。個人は波の上の泡沫にすぎないし、大人物も単なる偶然にすぎない。天才の支配といったって人形芝居であって、鉄の法則に対する笑止な格闘だ。」(2)

このふたつの書簡は、ビューヒナーの問題意識をそのまま浮き彫りにしている。とりわけ後者は、ビューヒナーが最後の二年と数か月に堰を切ったように創作活動に入ることの意味を問うとき、重要な書簡であるといわねばならない。そうした創作期の門口にこの書簡が位置しているからである。ヴェルナー・R・レーマンは、テクストの詳細な対照研究によって、ギムナジウム時代のビューヒナーへのフィヒテ哲学の強い影響を指摘したうえで、フィヒテ的理想主義からのビューヒナーの「転回」をこの書簡にみている。「主題としては初期の著作への関連を示し、また十か月のちには『ダントン』のなかで引用されるこの書簡において、ゲオルク・ビューヒナーの思考の決定的な転回が生じているのである。（……）以前はビューヒナーにとって妥当性を有していたすべてのものが、彼の世界像をそれまで構成してきたすべての価値と存在解釈が、突然、取り返しようもなく、この《歴史》の研究のもとで崩壊するのである。」(3)

レーマンは、フィヒテの歴史哲学の影響のもとに個人の生の発展と歴史の理性的な進歩(4)とを信ずる初期のビューヒナーの著作を参照しながら、この「転回」をこう規定している。「《個人》――それは初期の著作において、その行為が《永遠のとうとうと流れる奔流のなかに不動の姿で立つ《英雄であった――は、時間の車輪の輻を果敢に取りおさえる能力を喪失してしまう。すなわち《個人《は《波の上の泡沫にすぎない》ことになるのである。大人物は、また道徳的・芸術的・政治的天才の支配は――それは初期の著作において、自己自身を揺り動かす自由の結果であったが――これからは、《単なる偶然《、《人形芝居、鉄の法則に対する笑止な格闘《にすぎなく

なるのである。これとともに英雄的な行為理想主義の不可欠の前提がくずれ去るのである。」[5]

この「転回」以後、ビューヒナーは創作活動に入ってゆく。すなわち、この書簡から数か月後に『ダントンの死』の執筆にとりかかり、それから死までのわずか二年のあいだに『レンツ』『レオンスとレーナ』『ヴォイツェック』を創作してゆくのである。そしてこの「転回」における問題意識は、レーマンも指摘するように[6]、「転回」以前の思考における概念やメタファーがパロディーの素材となるというかたちで、『ダントン』、『レオンス』、『ヴォイツェック』をつらぬくことになるのである。それどころか、この「転回」において生じた問題意識こそがこれらの作品の主題を形成していくのである。[7]したがって、このようにも言えるだろう、――宿命に支配されているとしか言いようのない個人の行為の無力さと無意味さとのなかで、人間にはいかなる主体的営為が、退屈しのぎではない真の主体的営為が、この社会のなかで可能であろうか、そうした多分に悲観的な問いが、これらの作品をつらぬく、そしてビューヒナーの作家としての全活動が集中する最後の二年と数か月とをつらぬく、深刻な問いであったのだ。

それでは、小説『レンツ』は、このような問題意識とどのような関係にあるのであろうか。『レンツ』はいっけん、先の三つの戯曲とは異った問題意識の領域に属しているようにみえる。だが、このビューヒナー唯一の小説も、またおなじ問題意識につらぬかれているのである。ただ、『レンツ』においては、そうしたビューヒナーの問題意識がより原理的な問いとなっているのである。ここで原理的とは、絶えず現実の社会に触れつつ、かつまたそれに向けられて発せられてきたビューヒナーの問いが、つまり社会における人間の主体的営為の可能性と不可能性についての問いが、いわばそうした問い自体の根において問われているということである。すなわち、この小説では、社会や歴史といった現実の場を離れて、自我と世界という人間存在の基本構図において、人間の営為の可能性と不可能性とが問われているのである。『レンツ』は、ビューヒナーが素材とした牧師オーバーリンの日記の対象となっている人物、ミヒャエル・ラインホルト・レンツについての文学史的興味をひくひとつのエピソード、あるいはこのシュトルム・ウント・ドラングの詩人が狂ってゆく一時期についての物語といったものではなく、ひとつの自我の、世界のなかにおける闘いの記録なのである。

『レンツ』が、通常の小説にみられる物語としての筋の展開も、また結末も持ちあわせていないのもそれゆえである。ビューヒナー

は、レンツという人物についての、興味を惹くような何かの事件を順を追って物語るかわりに、ただ情況を設定してゆく。そして、そのそれぞれの情況のなかにレンツを置く。ビューヒナーが描いたのは、出来事ではなく――出来事はオーバーリンの記述に準拠している――、そうした個々の情況に対するレンツの対応のプロセスなのである。[8] すなわち、小説『レンツ』は、主人公レンツとその友人カウフマンとの会話という設定で展開されるビューヒナー自身の芸術論を中間部にはさんで、[9] ――このこともまた『レンツ』が単なる物語ではないことを示している！――レンツと自然、レンツと他者（ヴァルトバッハの人々、オーバーリン、そしてレンツ自身の回想の中に現われる恋人）、さらにレンツと神というかたちで、次々とレンツの闘いを記述してゆき、そのようにして人間存在にとって本質的な情況を設定してゆくのである。ここで、人間が存在する場を全体として世界と呼ぶならば、そうした本質的な情況を、世界の基本要素との対決の情況ということができよう。この意味において、レンツは世界と対決するといえるのである。

したがってまた、主人公レンツも一定の具体的性質や来歴を担った特定の人物である必要はないのである。じじつ、ビューヒナーは、レンツの来歴についてはいっさい語らず、冒頭からこの主人公をひとつの情況の中に投げ込んでいるし（山中を行くレンツ）、彼の具体的な性質や風貌についてもまったくといってよいほど語っていない。また、レンツが、モデルとしてはミヒャエル・ラインホルト・レンツであるということも、作品の中ほどの芸術会話に至ってようやく、彼の代表作『家庭教師』『兵士たち』の名があげられて、間接的に示されるのみであり、それもこの作品全体にとって本質的コメントであるとはいえない。レンツとは世界の中にあるひとりの人間、一個の自我なのである。

先に述べた、『レンツ』は、ひとつの自我の、世界のなかにおける闘いの記録であるということは、以上のように、この作品の形式と内容の特質によって裏づけられるのである。[10] それでは、この闘いはどのようなものとなるのであろうか。それは、「その最終的な帰結において理解しがたい無へと流れ込む」ことによって終わる。ビューヒナーはこの闘いの記録を、次のようにして終えているのである。「彼はすべてのことを、他の人と同じようにした、だが彼の中には恐しい空虚があった、彼はもはやなんの不安も感じなかった、なんの要求も。彼の存在は彼にとって必然の重荷であった。――そのようにして彼は生き続けていった。」[11] 世界のなかで闘いながら無

に至る自我のプロセス、それが小説『レンツ』のプロセスなのである。

ではなぜ、自我は無に至らねばならないのだろうか。今まで述べてきたことを前提としたうえで作品『レンツ』をみるならば、こうした問いが、この作品を考察する際のもっとも重要な問いとなってくるであろう。さて本論では、『レンツ』における主人公レンツの基本的情況とそこにみられるレンツの存在の基本的原理とを――それは作品の冒頭部分に主題提示のごとく集約的に設定されているが――、テクストに即して詳細に解釈することによって、こうした問いに対する答えをうることにしよう。レンツのプロセスはこの基本的情況と原理のうえに進行してゆく以上、これらを問うことは『レンツ』の本質に迫ることになると考えるからである。

だが、作品の考察に入るまえに、その予備的作業として、フィヒテにおける自我の問題を、初期の自我の哲学から後期の絶対者の哲学への移行期の著作とされている『人間の使命』において概観しておきたい。もちろん、この作業は、解釈のための恣意的な前提の提供ではない。

レーマンも示唆するように、[12] ビューヒナーがフィヒテから受容し、「転回」以前の彼の行為理想主義的思想を形成することになった考えかたは、フィヒテその人においては、その理想主義の体系から必然的に導き出される考えかたであった。そして、その理想主義の体系の基本原理は、フィヒテ自身が「事行」(Tathandlung) と名づけた「人間のすべての知識の根本原則」[13] を中核とした、自我の原理にほかならない。それは、カントの残した理論理性と実践理性との並列を、絶えず絶対的な自己定立をもとめて非我を克服してゆこうとする実践性をその根底に有するところのひとつの自我の働きに統合することによって、人間のすべての営為の基礎づけを行なおうとするものであった。すなわち「転回」以前のビューヒナーが影響を受け、みずからの歴史観や社会批判を形成していくことになったフィヒテの思想の基盤には、原理としてその自我の哲学があったのである。

そうであるならば、「転回」後に位置する『レンツ』を、それも先に示したように、「転回」によって生じた、人間の営為の可能性と不可能性についてのビューヒナーの問題意識をより原理的なかたちで反映している、世界の中における自我の闘いの記録であるという前提のもとで考察するとき、あらかじめフィテの自我の哲学を一瞥しておくことは大きな意義をもつといえるだろう。なかでも、『人

間の使命』は、フィヒテのうちたてた自我の哲学が必然的にはらむことになった問題性が、フィヒテ自身によって指摘され批判されているだけに、本論のような前提で『レンツ』をみる際には、まことに興味ぶかい著作といえるのである。

(2)

『懐疑』『知識』『信仰』の三部よりなる『人間の使命』の第一部『懐疑』において、フィヒテはまず、自然決定論の立場を示し、その体系において人間を規定しようとするが、この体系によれば、個々の人間の自我は「自己規定的な自然力の、宇宙によって規定されたひとつの現われ」[14]として自然によって完全に限定されており、「私」に起こるすべての事柄は自然の必然であるとされる。だが、自由な意志によって自己と自己をとりまく世界を形成したいと考える[15]フィヒテは、この自然必然性の体系には——それが悟性には満足を与えるものの——強い不満を示し、この体系に対して、ひとつの別な体系、すなわち「すべての外的諸力の影響から独立で自由に」[16]自己自身を決定する、自由な意志をもった「私」としての自我こそが「自然の主人」[17]であると考える「自由の体系」[18]を対置し、それによって自然必然性の体系を克服し、人間の自由を確保しようとする。

それは、すべてを、自我による表象の産物であるとすることによって可能となった。「私」と「霊」との対話という体裁をとった第二部『知識』の部においてそうした自我の観念論が展開されるのであるが、そこでフィヒテは、「われわれの外部の物の意識は絶対的に、われわれ自身の表象能力の産物以上の何ものでもない」[19]という命題をうちたて、われわれ自身と外部との連関もわれわれの思惟のなかでの連関にすぎず、またそれゆえ多様な諸物それ自体の相互連関も——そうした連関が「世界体系」を形成しているのであるが——やはりわれわれの思惟のなかでの連関にすぎないと宣言する。[20] 今や自我は一切の外部の諸物を像として表象する唯一絶対の中心点となり、それによって自然必然性の体系が克服され、自由が確保されるのである。

しかし、それはフィヒテにとって解決にはならない。なぜなら、すべてを自我の表象の所産とするこうした考えかたにたてば、なるほど自我をあらゆる依存から解放することが可能となるが、同時に、すべてが、したがって表象する自我自体すらも、表象の産物とし

て実体のない像にすぎないことになり、その結果、一切が「無」に帰してしまうという事態が生ずるからである。フィヒテはこう述べている――「今までみてきたところのすべてによれば、表象以外には、すなわち単なる意識としての意識の規定以外には絶対に何ものも存しない、それ以外は無（Nichts）なのである。だが表象は私にとって像にすぎない、すなわち実在性の影にすぎない。（……）私の外部にあるこの物体の世界が単なる表象のなかへと消え去り、影のなかに解消することには私は甘じることができよう。（……）だが、今までみてきたことのすべてによれば、私自身が物体の世界と同様に消え去ってしまう、私自身が、意味も目的もない単なる表象へと移行する。」[21] 自我が唯一絶対の原理に高められ、一切の中心点となるとき、まさにそのことによって自我はおのれ自身の根拠を喪失してしまうのである。「あらゆる実在性」は「夢」に、「自分じしんについての夢に凝集するひとつの夢」[22]にすぎなくなるのである。こうした自我がもつ深淵の前に立たされたフィヒテはどのような方向に解決をもとめてゆくのか、そのことが第三部『信仰』において述べられてゆくわけであるが、それに立ち入るのは本論の課題ではない。ここでは、フィヒテにおける自我がもつ「深淵」（Abgrund「無基底性」）[23]を、すなわち、表象する自我はそれが表象という機能を果たす限り、つまり自我である限り、その存在の基底を有しえないという事実を確認しておきたいのである。

むろん、ビューヒナーは、『レンツ』のなかで、フィヒテ自身の指摘においてみたような観念論的自我がもつ問題性を、テーゼとして展開したのではない。理想主義からの「転回」以後のビューヒナーの問題意識が、作品を書きしるすとき、おのずとその作品のなかで、理想主義体系のはらむこの原理的問題に、彼の時代とさらにはヨーロッパ近代が内包する本質的問題[24]に、出会うのである。では作品『レンツ』をみることにしよう。

（3）

物語は、レンツの行く冬の山中の描写ではじまる。「一月二十日、レンツは山中を行った」[25]と、簡潔に日記風に事実が述べられたあとに、動詞を省略し、わずかに方向を示す副詞を添える以外には単に名詞を並列しただけの、冬の山の情景が続く。峰と谷、不毛と生

命、硬さと軟かさ、密と疎、雪の白、岩の灰色、草の緑。ここには、多様な自然が、その多様さのまま描かれている。だが、レンツにはそうした個々の自然の事物を相互に関連づけ、自己の世界として編成することができない。レンツと自然とのあいだには「関わり」が存していないのである。ひとつひとつの事物を単に列挙しながらその事物の存在をくっきりと浮かびあがらせるような、名詞のみをコンマと「そして」(und)で連ねてゆく簡潔な文体が、そのことを、そしてまたレンツと対比せしめられる自然の偉大さを暗示している。[26] レンツは偉大な自然から隔絶しているのである。

そのことは、道を行くレンツの周囲の描写からも明白なものとなる。ここでは、「じめじめとして寒かった」[27]とか、「すべてはとてもじっとりとしていた」[28]とかいった、レンツの肌をとおした知覚が述べられている。しかし、この知覚ははなはだ不確実でこころもとなく、また陰鬱だ。いま、それ自体としては偉大な自然も、レンツにとってはただ漠然と「じめじめとした寒さ」としてしか感じられない。「とてもじっとりと」とか、「とてもゆっくりと、とても鈍重に」とかというふうに文末にひきずられながら繰り返される、「とても」(so) とじっとりとした重苦しさを表わす形容詞との組み合わせが、そうしたレンツの惨めな情況をはっきりと印象づけている。

それ自体としては偉大な自然を「じめじめとした寒さ」としてしか感じられない情況――レンツは、偉大な自然の外部に閉め出されているのだ。いまこの自然の世界を全体として宇宙的な根源的実在ととるならば――じじつ、のちにみるように、この自然との対決のなかで「宇宙」(das All) という言葉がきわめて印象深かく語られるのである――レンツは根源的実在と隔絶して存在していると言うことができよう。そして、これこそがレンツの基本的情況なのである。この基本的情況から闘いが始まってゆく。

周囲には無関心に、どんどんと歩んでゆくうちに、レンツは「逆立ちして歩けないこと」が「不愉快」であると感じる。この「不愉快」さのなかに、根源的実在からの隔絶という基本的情況を解消しようとするひとつの願望が隠されているのである。その願望は根源的実在としての自然の世界を、レンツみずからの秩序に従わしめて、みずからのなかにとり込もうとする希求として現われる。

「逆立ちして歩けないことだけが、彼には不愉快だった」[29]――もちろん、このいっけんグロテスクな表現は、単にレンツの外面的、

部分的な性格描写と解さるべきではなく、レンツの、彼自身および世界との関係をトータルに含んだ表現とみなされるべきである。[30]

ここで、「逆立ちして歩けない」ということは、宇宙がその秩序としてもつ重力の作用の結果であり、[31] レンツはそれを「不愉快」と感じている。つまり、レンツには、そうした宇宙の秩序が厭わしいのである。それは、そのような宇宙の秩序に抗う力がレンツにはたらいているからである。その力とは何であろうか。それは自我がもつ力である。精神――それが現われ作用する点が自我である――は、宇宙が秩序としてもつ自然の力に対抗するのである。つまりレンツはいま、重力に抗して「逆立ち」したいのである。[32] すなわちここでは、「不愉快」さの意識というかたちで、自我が、みずからの外部の秩序に編入されることを拒否して、逆に、みずからの外部のすべてをみずからの秩序（表象）に編入しようと、みずからを主張しているのである。みずからの絶対的定立をめざす自我は、外部の力としての重力をこうむることを拒絶して、「逆立ち」を願望しているのである。

ところでもし、「逆立ち」が可能となったとしたらどうであろうか。彼は足もとの「地盤」(Grund) を失ってしまい、パウル・ツェランがこの箇所について示唆したように、[33] 足もとに「深淵」(Abgrund) をもつことになるだろう。すなわち「基底」(Grund) を失ってしまうということである。「逆立ち」することによって、自我は、みずからの存在の基底を喪失してしまうことになるのである。つまり、「逆立ち」したいというレンツの願望、すなわちすべてを自我による表象としてみずからの秩序に編入しようとする願望は、このように足もとに深淵をもつという危険を――ということは自我自身の基底を喪失してしまうという危険を――はらんでいるわけである。こうして、根源的実在からの隔絶というレンツの基本的情況は、レンツがその情況の解消に向かうとき、レンツに大きな危険をもたらすことになるのである。そして、じっさいレンツは「逆立ち」してゆくのである。つまり、自我の深淵のなかに沈んでゆくのである。無に至るこの小説の帰結は、全体を先取りしていえば、そのことにほかならないのである。だが、そのプロセスは、こうしたレンツの傾向の単なる線形的な進行ではない。根源的実在からの隔絶を埋めるさらに別の可能性が問われるのである。

レンツが足早に進んでゆくのにしたがって次々と後に飛んでゆく岩がレンツの目に映るとき、森が彼の足もとで揺れ、霧が流れて種

々のかたちを結んだり崩したりするとき、レンツには「初めに彼の胸のなかには押し迫ってくるものがあった。」[34] ビューヒナーはまずここで「初めに」(anfangs) という言葉を使って、新しい情況の開始を示唆している。それはいかなる情況であろうか。

それについてはすでに、「初めに彼の胸のなかには押し迫ってくるものがあった」(Anfangs drängte es ihm in der Brust) という文そのものが、ひとつの暗示を提供している。彼の胸のなかには「それ」(es) が「押し寄せた」(drängte) ——すなわち外部の力(「それ」) を、レンツが、つまり彼の自我が、こうむっているのである。これは、すべての外的な力を拒否し、みずからを一切の絶対的中心点として定立する自我、すなわち「逆立ち」を願望する自我とは相反する在りかたである。ここでは、「こうむる」という在りかたをすることによって、自我は、表象する自我とは別の情況に入ってゆくのである。

もちろん、強烈な心の動きを表現するとき、非人称の es を主語として用いるのはドイツ語の慣用的表現法のひとつである。だが、その表現法そのものが大きな意味をもち、それゆえそうした表現法が用いられることが意味ぶかいのである。今世紀の特異な、だがその奥行きの深い思想で今後も広く考究に価するであろう思想家のひとり、ルートヴィッヒ・クラーゲスは、「脱自己化」としてのエクスターゼを説明するとき、こうした表現法に注目して次のように述べている、——「インドゲルマン語のなかで、感情の深さと著しさとを、身にふりかかること、何かをこうむること、何かに帰属することとして叙述しないような言語はただのひとつもないとさえいえる！》情念《(πάθος, Pathos)》激情《(Passio Passion)》情熱《(Leidenschaft) (……) われわれが意欲したり考えたりするときはいつも、私 (ich) は考える、私は意欲する、私は為すという。(……) しかし、大いなるものを感じて体験したときには、(……) こういうのである、それ(es)が私をとらえた、むんずとつかんだ、圧倒した、奪い去った！ 何がわれわれを奪い去るのか？ 生がである！ そして何が奪い去られるのか？ 自我がである！」[35] そして、完全に帰属せしめられた自我はもはや「自我」とは言いがたいもの、「自我とは異質の性格」をもったものであるとされている。またちなみに、クラーゲスが「奪い去る」力としての「生」を口にするとき、その「生」とは宇宙的根源的生を意味している。——このクラーゲスの説明は、ここで始まったレンツの新しい情況の意味と性質とを、何と適切に語ってくれていることだろう。レンツは表象する意識としての自我を超越して宇宙と一体化する方向に向かっているの

である。そして、自我が「こうむる」という在りかたをすることが、その方向への最初の段階なのだ。

さて、こうした事情は、それに続いて、レンツが、自我にとっての客体としての対象をもはや定立できなくなることから、そしてさらに、世界内存在としての時間と距離との意識を失うことから、いっそう明白なものとなる。「彼は何ものかをもとめた、失われた夢をもとめるように、だが何ものも見いださなかった。[36]」「ひとつの斜面をくだって離れた一点に到達するのに非常に多くの時間を費したことが、彼には理解できなかった。すべてを、ほんの二三歩で測ることができるにちがいないと彼は思ったのだ。[37]」——レンツは、すべてを二三歩で「測る」(ausmessen)ことができると思っている。彼はすでに、通常われわれが計量し測定するときに基準にする尺度、すなわち自我による表象像としての世界がもつ「尺度」(Maß＜messen)とは別の尺度を基準としているのである。[38]

こうした段階を経て、レンツには宇宙との一体化の瞬間が訪れる。それは、まず、激しく変転する自然のとりどりの様相を視覚と聴覚とからリアルに描写した(接続詞 wenn に導かれる極度に長い)ふたつの従属文に、「彼の胸をひき裂くものがあった」(riß es ihm in der Brust)[39]というレンツの心的情況を叙した短い主文が対置されるというかたちで、述べはじめられる。この主文がふたたび非人称 es を主語とした表現をとっていることの意味は、もはや繰り返す必要がないだろう。さて一方、ふたつの長い従属文において、自然は、上昇と下降をたえず繰り返しながら、また静と動、明と暗、さらには音と色と形象とを交錯させながら、そしてそうした種々の対立的要素を相互に補完させながら、全体として、光に満ち生き生きとしたまま調和している宇宙を形成している。つまり自然は、激しく多様に変転し流動しながらも、総体として秩序だった、調和的な有機体となっているのである。この動きと調和とは、この箇所の文体によっても裏づけられている。すなわち上昇と下降とを表わす前置詞・副詞が対になって使用され、それがそれぞれの描写を湛えた節の枠ぐみをつくり、全体として文の安定がもたらされているのである。さらに、長いふたつの従属文に比べてあまりにも短く、簡潔な主文によって、偉大な自然とレンツとの対比が、みごとに浮き彫りにされている。[40]

こうして、まずレンツと自然との対比をきわ立たせることによって、ビューヒナーは、それに続く、レンツと自然との隔たりが乗り超えられる瞬間、つまり、レンツの、そうした自然との合一による根源的な宇宙の秩序への参入の瞬間を、いっそう圧倒的なものにす

ることに成功している。レンツは意力を集中し、「嵐をみずからのうちに引き込まねばならない、すべてをみずからのうちに取り込まねばならない」(er müsse den Sturm in sich ziehen, alles in sich fassen)[41]と、自然との一致を、まず、自然をみずからのうちに引き入れる方向(in sich)でもとめる。それはさしあたって、すべてを自我の表象として自我のうちに取り込んでしまおうとする「逆立ち」をもとめる自我の希求と同じ希求であるが、「こうむる」というかたちで、表象する自我をもはや超越しているレンツには、そうした表象作用が起こるべくもない。したがってこのような希求の実現は、逆のかたちで、すなわち彼のほうが自然のうちに入り込むことによって成就するのである。「彼は宇宙のなかに穴を掘って入り込んだ」(er wühlte sich in das All hinein)[42]のである。

ここで「宇宙」(das All)とは、単なる天文学的空間ではなく、それは人間や自然の一切を含んだ全存在の綜合概念と考えられうるであろう。つまりレンツは、真の実在としての根源的な宇宙に参入したのである。そして、そうすることは「彼〈レンツ〉に痛みを与える快感」(eine Lust, die ihm wehe tut)[43]であった。今や「大地」(die Erde=「現世」)は退いて、「遊星のように小さくなり」、ごうごうと流れる澄んだ「奔流」[44]の中に沈んでゆく。

ところで根源的な宇宙に参入することがなぜ「痛みを与える快感」なのだろうか。それは、肉体が犠牲にされるからである。[45]根源的実在としての宇宙のなかに参入することは、単に自我の超克によるばかりではなく、「受苦型の神秘主義」[46]が例証するように、肉体までも含めた個体としての個別の全存在が犠牲にされることによって実現する。ここでは肉体が犠牲にされることに対する肉体自身の抵抗が「痛み」なのである。そう考えるなら、レンツにとってなぜそれが「快感」——希求の実現の体感[47]——であるのかが理解できるだろう。すなわち、今ここで肉体が犠牲にされてゆくことによって、根源的実在からの隔絶という基本的情況のなかで希求される、そうした情況の克服が、宇宙への参入というかたちで実現しようとしているのであるが、「痛み」は、まさにそのことの証しであるがゆえに、「快感」と並立しうるのである。レンツはいま、表象する自我から脱け出し、さらに自己の個体としての生を捨象して、根源的実在としての宇宙の中に参入しているのである。

しかし、そうした浄福なときは「ほんのわずかの瞬間」にすぎない。長いふたつの従属文で始まった叙述は、はじめてここでその真

の帰結を見いだす、[48]――「しかし、それはほんのわずかの瞬間にすぎなかった」[49]というこの文に、ビューヒナーは最強度の表現値を与えているのである。自我の超克による宇宙との合一は瞬間的なものにすぎず、レンツにとってはその持続は不可能なのである。すなわち、このような方向で根源的実在からの隔絶を埋めることは不可能だったのである。

こうしてレンツはふたたび、根源的実在からの隔絶という彼の基本的情況にひき戻され、夕暮れ近くに山頂の雪原にたどりつく。「彼はひとりきりだった、まったくひとりきりだった」[50]という漸層法(クリーマクス)をともなった表現が、宇宙から現実の世界(自我による表象の世界)に突き戻されて、ただひとりきりで自我の「深淵」(無基底性)の前に立つレンツの絶望をきわ立たせている。「自分は空虚のなかに(im Leeren)いるんだ!」[51]――彼は山の斜面を飛ぶように下ってゆく。

そのとき、そうした「無」(Nichts)のなかで「名のない不安」が彼をつかみ、それに続いて「何か」が、「何か恐しいもの」が、「人間の耐えることのできない何か」が、ついには「狂気」(Wahnsinn)そのものが、自分のあとを追ってくるように、彼には思われるのだった。[52]ここでは、「不安」とか「狂気」とか、あるいは「何か」とかといった通常においては人間的主語に目的語的に対応するような語が、逆に、文の主語となっているという文体が、注目に価する。それは、先にみたレンツの自我が超越されるときの非人称の es(「それ」)を思わせる文体であるが、その場合とは根本的な相違のあることが認められねばならない。この場合のレンツは、外部の力(「それ」)をこうむっているのではない。「不安」とか「狂気」とかといったレンツ自身の心的情況が――あるいはこの箇所の少し前に述べられているようにレンツの身体の一部が[53]――レンツ自身から分裂してレンツに対峙し、またレンツに対して力を行使するのである。すなわち、外部の力をこうむって自我が超克される方向に向かっているのではなく、表象する意識としての自我が分裂しているのである。レンツにとっては、「狂気」が追いかけてくると感じられるそうした自己分裂そのものこそが、まさに狂気への入り口となっているのである。そしてこの入り口からレンツはあと戻りのしようのない無へのプロセスに入ってゆくのである。

ヴァルトバッハのオーバーリンの牧師館に着いたレンツは、オーバーリンとその家族のなかで安らぎをみいだすが、その夜ひとりになると狂気の発作にみまわれる。「すべては闇だ、無だ、――彼は自分自身がひとつの夢であった。」[54] 表象する自我の作用によって自己自身が客体化されたとき、その自己自身が――フィヒテにおいてみたように――意味も目的もない単なる表象に、実体のない像に、すなわち「無」になってしまう。レンツには「自分自身」(sich selbst) が「ひとつの夢」となり、ついには自分自身を失ってしまうのである。「彼はもはや自分を (sich) 見いだすことができなかった」のである。[55]

そのとき「不可解な本能」(ein dunkler Instinkt) が「自分を (sich) 救うべく彼を駆りたて (treiben)」る。[56] ここでは「本能」が、こうした情況からの救済の可能性として現われてくるのである。だが「本能」には、表象によって存在の基底を失い「無」に至ってしまったレンツに、ふたたび基底を与えることができない。なぜなら「本能」には、レンツと根源的実在とを一致せしめることができないからである。

なるほど「本能」は、意志による統御をつきくずし、その意味で意志の作用点としての自我を超克するということはできよう。だが「本能」はあくまでも個体としての存在者の範囲で、個体としての存在者の維持のために機能する。すなわち、「本能」によっては、単に「自己」の意識的な部分たる「自我」が克服されるにすぎないのであって、肉体までも含めた個体としての「自己」そのものが放棄されるのではない。それどころか――この作品の終わり近くの、もはや完全に自己統御の能力を失ったレンツを「保存本能」(Erhaltungstrieb; Trieb〈treiben) が救済しようとする場面[57]で端的に示されているように――、「本能」は「自己」保存の機能を果たすのである。それに対して、根源的実在との一致は、先にレンツのそうした場面でみたように、個体としての全存在が、すなわち「自己」そのものが、克服されることによってはじめて可能となるのである。それゆえ、「本能」はなるほど「自我」の力を奪いはするものの、レンツをして根源的実在と一致せしめることはできないのである。[58]

ところで、そのように考えるならばまた、「自我」とは「自己」の定立的な意識であるといえるだろう。いまレンツの「自己」は「自己」の定立的な意識としての「自我」を失っているのである。

石に躓き、またみずからを爪でかきむしった「痛み」が、彼に意識を回復させはじめる。[59] 肉体を契機として「自我」が復活するのである。レンツの「自我」はようやく「自己」のもとにかえる（zu sich kommen）「われにかえ」）るのである。[60] つまり「われにかえる」とは「自我」が復活して「自己」を定立的に意識することなのである。すぐあとに続く文で、ビューヒナーはこう叙しているではないか――、「彼の状態についての完全な意識が彼の前に立った」（das ganze Bewußtsein seiner Lage stand vor ihm）と。[61]

「彼の状態についての完全な意識」とは「自己」についての定立的な意識にほかならないであろう。今やふたたびレンツには「自我」が回復したのである。しかしそれは、表象する意識としての自我の宿命である分裂を内包している。「意識」は「彼の前に立っている」のである。ふたたび彼は自我の深淵のふちに立っているのだ。そしてすでにここで、レンツの「狂気」の性格があきらかになってこよう。レンツの「狂気」のプロセスは、自我の深淵のなかに、救済が不可能なまま沈んでゆくことなのだ。

暗くなって「対象」（Gegenstände）が見えなくなると「すべては夢にすぎなかった」という思いがレンツのうちにきざしてくるが、ビューヒナーは、そうしたレンツの情況を「狂気の夢魔（アルプ）が彼の足もとに坐った」[62]と叙している。夜になり、視覚的に対象を定立できなくなると、自我の表象作用に対する不信と不安の念が目覚めてくるのである。すなわち「すべては夢にすぎなかった」という想念である。いま、ビューヒナーはそうした想念こそが「狂気」（Wahnsinn）であると言っているのである。そして、この想念はまさに自我の深淵ということにほかならないであろう。そのことは、レンツの狂気が決定的となった物語の最後のほうではっきりと示されている。「彼には彼ひとりだけが存在しているように、世界は彼の空想（Einbildung「像成」）の中にのみ存するように、彼以外には何ものも存しないように思われた。（……）彼を責め苛む表象の数々（Vorstellungen）のみがあった」[63]表象する意識としての自我がもつ深淵のなかでは、すべての存在が「影絵」[64]（Schattenspiel）になってしまう。「存在」（Dasein）を「影」（Schatten）としてしまう「思い違い」（Wahn）をもつこと、それがレンツの「狂気」（Wahnsinn）なのである。

（4）

これまでみてきたように、「無」に至るレンツのプロセスは、表象する自我の深淵へと沈んでゆくことなのである。根源的実在からの隔絶という基本的情況から、そうした情況の克服をめざして「関わり」がもとめられるとき、根源的実在への参入という方向が（その瞬間の持続の不可能性ゆえに）本質的に不可能である以上、そのような自我の深淵へと沈んでゆかざるをえなかったのである。そして、それがレンツの存在の基本的な原理なのだ。

もちろん、ここで考察したのはこの小説の主題提示的な冒頭部分——もっともこの冒頭部分はオーバーリンの日記によらない、完全なビューヒナーの創作であるという点で、『レンツ』の本質に、そしてビューヒナーの文学の本質に迫ろうとするとき非常に重要な箇所なのであるが——であるにすぎない。『レンツ』においては、こうした原理にもとづく自我の深淵への転落に対して、さらに別の救済の可能性が語られている。人間共同体において存在の基底を回復することの可能性が、オーバーリンとその共同体へのレンツの「関わり」というかたちで問われているのである。この点についての考察をさらに進めるならば、『レンツ』や他の作品と、ビューヒナーの社会や革命についての思想との関係をあきらかにすることになるだろう。それはまた、レーマンの指摘するビューヒナーの「転回」の質と内容をいっそう詳細に吟味することにもなろう。こうした今後の課題はここに暗示するにとどめ、今回は『レンツ』の基本問題の考察をめざした本論をひとまずここで終えることにする。

（注）

(1) Georg Büchner: Sämtliche werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar. Hrsg. von Werner R. Lehmann. Bd. 2, S. 455（以下 S. W. の略号を用いることにする）

(2) S. W. Bd. 2, S. 425

(3) Werner R. Lehmann: Prolegomena zu einer historisch-kritischen Büchner-Ausgabe. In: Gratulatio. Hamburg 1963. S. 210

(4) Lehmann: a. a. O. S. 206

(5) Lehmann: a. a. O. S. 211f.

(6) Lehmann: a. a. O. S. 212

(7) それは、文化や道徳による人間的完成とそれにもとづく社会といった、人間と社会についての「理念」から隔絶した、社会のなかでもっとも疎外された階級に属する人々の存在に光をあてた『ヴォイツェック』、革命という「歴史の宿命」とその渦中にある個人の運命を、革命を押し進めてゆく力としての社会的道義と個人の生の諸相の対立・相克を骨子として展開した『ダントンの死』、また、主体的な行為の可能性を奪われた人間の生がもつ「どうすることもできない退屈」をその重要な主題とする『レオンスとレーナ』を想起してみるだけでも明白であろう。

(8) ベンノ・・フォン・ヴィーゼ(Benno von Wiese: Lenz. In: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka. Interpretation II. Düsseldorf 1962. S. 105)は、『レンツ』と通常の小説との差異に注目しながら、『レンツ』においては「ことさらにきわ立たせられた出来事が叙述されるのではなく、外的な事象はひとつの内的なプロセスに変化している」と述べている。

(9) vgl. Hans Mayer: Georg Büchner und seine Zeit. Frankfurt a. M. 1972 (suhrkamp taschenbuch). S. 287, 424ff.

(10) B. v. Wiese: a. a. O. S. 106

(11) S. W. Bd. 1. S. 101

(12) Lehmann: a. a. O. S. 202

(13) Johann Gottlieb Fichte: Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre. In: Fichte: Gesamtausgabe der bayerische Akademie der Wissenchaften, Werke Bd. 2. Stuttgart-Bad Connstatt 1965. S. 255.

(14) Fichte: Die Bestimmuug des Menschen. Hrsg. von Theodor Ballauff und Ignaz Klein. Stuttgart (Reclam Universal-Bibliothek). S. 31

(15) Fichte: a. a. O. S. 35

(16) Fichte: a. a. O. S. 39

(17) Fichte: a. a. O. S. 36

(18) Fichte: a. a. O. S. 40

(19) Fichte: a. a. O. S. 93

(20) vgl. Fichte: a. a. O. S. 94.

(21) Fichte: a. a. O. S. 95f.

(22) Fichte: a. a. O. S. 101

(23) ビューヒナーも含めた一九世記におけるドイツ文学の基本問題のひとつとして「自我の深淵」(Der Abgrund des Ichs) という問題があったことについては次の書物を参照。 Alfred Doppler: Der Abgrund. Studien zur Bedeutungsgeschichte eines Motivs. Graz-Wien-Köln 1968. S. 150ff. さらに西欧哲学及びドイツ文学における「深淵の概念」についても同書参照 (S. 9ff. bes. 19ff.=Abgund-Motiv bei Heidegger)。

(24) vgl. Martin Heidegger: Die Zeit des Weltbildes. In: Holzwege. Frankfurt/M, O. J., S. 81 この書物のなかで、ハイデッガーは人間が主体となってその表象による像としての世界に対すること、人間が「存在者そのものの関与の中心となる」ことを、ヨーロッパ近代の本質的現象とみ、それに鋭い批判を加えている。

(25) S. W. Bd. 1, S. 79, Z. 1 (以下『レンツ』の引用は行数も付す)

(26) ペーター・ハズベク (Peter Hasubek: "Ruhe" und "Bewegeung". Versuch einer Stilanalyse von Georg Büchners "Lenz". In: Germanisch-Romanische Monatschrift. Bd. XIX, Heft 1, 1967) は、『レンツ』における文体要素としての動詞の省略の機能を、自然描写における場合と行動描写における場合とに分類し、前者においては、もろもろの印象の拘束のない列挙によって落ちつきあるいは静止の外観が生み出されるとしている (a. a. O. S. 38)。さらに彼は「そして」(und) によって二個または三個の形容詞が結ばれている場合について、それを、文体にある種の孤立性を、自己充足的な感じを与えるものとしているが (a. a. O. S. 52f.)、この部分の「そして」と名詞の場合についても同じことがいえるのではあるまいか。

(27) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 3

(28) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 6

(29) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 9～11

(30) Vgl. H. P. Pütz: Büchners "Lenz" und seine Quelle. Bericht und Erzählung. In: Zeitschrift für deutsche Philologie. 84. Band 1965. S. 19f.

(31) Vgl. Doppler: a. a. O. S. 188

(32) ディーター・アレント (Dieter Arendt: Der 〉poetische Nihilismus〈 in der Romantik. Tübingen 1972. S. 179f.) は、レンツのこの「逆立ち」の願望に「観念論の正確な写像」——アレントはここで「観念論」(Idealismus) という言葉を、フィヒテの「観念論の自我の哲学」を前提として使用している——をみている。「〉精神〈 の自由は、何ものにも妨げられない天への眺望をもって完全であるといえよう。だが同時にそのことによって、自身を自由であると妄想しているこの〉精神〈 のもつ真の情況が姿を現わすのである。すなわち、観念論的な〉精神〈、それはこの人物（レンツ）に代表されているのであるが、それは足もとの地盤を失ってしまっているのである。彼はなるほど天に近い。だが彼はそれを「深淵」(Abgrund) として経験するのである。なるほど宇宙を間近かに見る。だがそれを無 (Nichts) として経験するのである。観念論的な〉精神〈 は、この人物の願望をもって、逆立ちして歩んでゆかねばならないという、それに適合した真実を経験しているのである。この〉精神〈 はなるほど人間の頭に由来しているのであるが、それは自立的にそして独裁的になり、自然的な力から遠ざけられてしまった人間にみずからをゆだねるのである。」

(33) Paul Celan: Büchner-Preis-Rede 1960 In: Büchner-Preis-Reden 1951–1971. Stuttgart 1972. (Reclam Univrsal-Bibliothek) S. 95

(34) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 11

(35) Ludwig Klages: Vom kosmogonischen Eros. (6. Aufl.) Bonn 1963. S. 64f.

(36) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 14～15

(37) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 17～20

(38) Vgl. Heidegger: a. a. O. S. 73, S. 80

(39) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 35

(40) Vgl. Karl Viëtor: "Lenz". Erzählung von Georg Büchner. In: Germanisch-Romanische Monatschrift. 25, 1937. S. 2f.「沸騰する生命は、レンツの安まることのないゆがんだ内部に対する圧倒的な対立像として現われている。」

(41) S. W. Bd. 1 S. 79 Z. 36～37

(42) S. W. Bd. 1 S. 78 Z. 38

(43) S. W. Bd. 1 S. 79, Z. 38～S. 80, Z. 1

(44) この「奔流」(der Strom) について、シェリングが自然の絶対的活動性について説明する際に用いた比喩としての「奔流」(F. W. J. Schelling: Erster Entwurf eines Systems der Naturphilosphie. In: Schelling, Sämtliche Werke. Stuttgart und Augsburg 1858. Bd. 3 S. 19) を想起することは、不当な解釈のしすぎであろうか。すなわち、この「奔流」の性質を、絶えず流動しながら、そのなかではすべてが純粋な自己同一性 (reine Identität) に支配されているものと考えるならば、ここでレンツにとって、表象による、像としての世界である「現世」は、純粋に自己同一的な自然の生の世界、根源的な宇宙へと解消していると解釈することができないであろうか。

(45) 『グリム・ドイツ語辞典』は、この "weh tun" という熟語について、肉体的苦痛に対する適用のほうが精神的苦痛に対する適用に優先する用法である、と説明している (Bd. 14, 1, 1)。

(46) 磔刑に象徴されるキリストの肉体的受苦に、根源的なるもの (神) との融合をめざす多くの神秘主義者たちが重大な意義を見いだしている。ニーグレン『アガペーとエロス』岸千年・大内弘助共訳 (新教出版社・一九六三年)、第三巻二四〇頁以下参照のこと。

(47) 『グリム・ドイツ語辞典』は、(「欲望」や「嗜好」ではなく)「快感」とてしの Lust を、ひとつの望みの実現において芽生える「快適さ」(Behagen)「歓び」(Freude)「満足」(Vergnügen)「喜悦」(Ergötzung) と説明したうえで、カントの次のような定義を引用している。「Lust とは、事物あるいは行為の、生の主観的条件との一致の観念である。」(Bd. 6)

(48) アレント (D. Arendt: a. a. O. S. 175.) によれば、長大なふたつの wenn 文章は "riß es ihm in der Brust" という主文につながり、文はそこで内容的に終わったようにみえるが、統語論的には緊張をさらに持続させているとされている。「このような文形に、内容的には事態と結果との、期待と充足との緊張が対応している。ただしその緊張は、反語的な "aber" によって幻滅に至る過度の緊張なのである。」

(49) S. W. Bd. 1 S. 80, Z. 5

(50) S. W. Bd. 1 S. 80, Z. 14

(51) S. W. Bd. 1 S. 80, Z. 17～18

(52) S. W. Bd. 1 S. 80, Z. 17～22

(53) S. W. Bd. 1 S. 80, Z. 15～16「彼の足の関節が彼の下で雷のように音を立てた。」
(54) S. W. Bd. 1 S. 81, Z. 21～22
(55) S. W. Bd. 1 S. 81, Z. 24
(56) S. W. Bd. 1 S. 81, Z. 24～25
(57) S. W. Bd. 1 S. 99, Z. 6 および S. 98, Z. 4「内なる衝動 (ein innerlicher Instinkt) が彼を強いた。」
(58) Vgl. Klages: a. a. O. S. 64.
(59) S. W. Bd. 1 S. 81, Z. 25～27
(60) S. W. Bd. 1 S. 81, Z. 29～30
(61) S. W. Bd. 1 S. 81, Z. 30～31
(62) S. W. Bd. 1 S. 82, Z. 34
(63) S. W. Bd. 1 S. 99, Z. 11～14
(64) Vgl. S. W. Bd. 1 S, 80. Z. 6～7